

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立

大津不二也

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)

この物語は、平家琵琶による語り物の一つであるが、今はもう全く跡を断って再びこれを聞くよすがも無い。しかし、この哀愁悲話あはれさむいは、あの悠久な山の山容とともに、人々の心のなかにロマンとしてよみがえ蘇よみがえって来るであろう。

この火の山合戦の物語は、ただ琵琶の語りの詞だけでなく、江戸時代に盛んだったと言う川棚芝居の台本でもあったかも知れない。しかし、これについては寡聞かぶんにして知らない。

ここにご教示を乞う次第である。

筋書は、だいたい次のようである。
火の山の領主の子小舟の中將春元は数奇な運命を負って生れ、元服して上洛し、関白せきはく・広直卿ひろなおの計らいによって時の欽明天皇きんめん(六世紀)に拝謁し、中国の守護を命ぜられ、従二位の位を戴く。

春元の関白邸滞在中に関白の姫玉姫が春元に思いを掛けるが、ならず、帰国後春元は岡山城主望山もち・正司直行の独り娘花園まはなの前を娶る。その意趣晴らしに、関白が火の山城主に無理無難むじむなん(斧子きし種千石)

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立

あく繩干把なわ、黒胡麻千石。次いで、金の扇に鶯ひなの雛ひな十二羽とまらせて立とう立つまいと翼を広げているところ)を吹き掛け、それができないなら春元の妻花園

の前を宮中に差し出して仕えさせよとの求めがある。これらの難題も忠実な住民や忠臣の計らいによって救われるが、忠臣信太の次郎光直みつなおたちは上洛して関白を詰問して合戦となり、春元は関白を討ち取る。そして朝敵の汚名を受け、城に立帰り、本丸の広間に火を掛けて春元・花園の前・勇士たち一同枕を並べて自害する。

この物語は、吉村藤舟著「郷土物語」と下関市川中地区垢田あかたの天台宗吉祥院の「火の山雑記」のなかで知られるが、後者に拠った。これは、下関市の郷土研究家吉村次郎が小生に提供されたものである。こゝに、同氏に対して感謝の意を表する。

筆写に当っては、誤写の個所があるかも知れないが、それは筆者が責めを負うべきものである。(なお、本文の読みがなは、仮に現代かなづかいで筆者がつけた。字の右の？は判読に疑問を持つものである。)

(一)

前田火の山の大将小舟の弾正光元は名君で、臣下にも不足は無く、朝日の昇るような勢であったが、後継が無かった。光元は北の方と相談して、豊前の小倉の彦山大権現に祈願をこめることとなった。七日の満願の夜、八十才に余る老人が現れて、兩人ともシナで行った行いの罪によって一子は授けられないとのことであった。光元は怒るが、北の方になだめられて更に祈ったところ、以前の老人が現れ、「天に一つの星があつて火星と言うが、これを授ける。しかし、十七才の春には、時の帝に叛き火山滅亡の原因となろう。」と言う意味のことを告げて姿を消す。このような運命を背負つて春若（後の春元）が生れる。(一)の終りの部分を引用する。

△早や七年も移りける　げに梅檀はふたばにひとし　文武
の道に心を委ね　夜を日についての御修業　臣たりとも
擯斥せず　只も実直と思ひつめ　満十四才となりぬれば　臣下
あくまで身の丈人に勝れ　言ふ物腰のしとやかさ　尊ぶ事神の
を愛する事子の如く　又臣下のめいめいも　名を
如く　いよよ本年十五才　元服遊ばし春若君　血氣
ば小舟の中將春元公と改めて　元服祝ひに春元は　大和の皇居に参内の
の勇士十余名　前後左右に従はせ　いよいよ前田の火の山が　上下
結果が如何に相成るか　追々後と知られたる　かやるの大騒動は

(二)

△時津風天の御披ひ絶えやらぬ　股肱の臣等一同は　君
を守護し奉り　順風にまかして漕ぐ船は　大和の皇居御
参内　新たに下ろす御新造　神風颯々と吹き来たり
順風にまかして漕ぐ船は　あたかも矢を射る如くにて
浪華の浦に着きにける　で始まる。

小舟中將春元は浪華の港から大和の関白直広直卿の館へ行き、忠臣星野の太郎盛平は参内の取り計らいを関白に頼み、時の帝欽明天皇に拜謁を賜わり、帝から中国の主として帝を助けよとの御命令と従二位の位を戴く。春元の関白邸滞在中に関白の姫玉姫が春元に恋文を送るが、春元は応じない。関白は姫のふしだらを怒り、姫の処理を臣管野弥五郎に命ずる。管野は春元の忠臣盛平に婚姻の取りなしを頼む。盛平は悪くは取り計らはない、帰国の上返事すると言つて帰国する。盛平は帰国して、その婚姻について関白が悪賢く姫を人質に送り親戚の交際をして油断をうかごうのかも知れない、それかと言つて拒めば火の山のお家の大事になるかも知れないなどと思ひ、重臣に相談するが、決まらない。終りの部分に来て、

△老臣一統集りて　協議を凝らすばっかりにて　どうせ
一度は火の山に　かゝる大事がさし起こり　関白殿を向
ふに立て　無理矢理でも朝敵の　汚名を蒙り飽くとも
従二位中將春元が　都の方へ攻め上り　ひと合戦と云う
ような　いよよ火の山合戦の　大眼目のひと巻は
追々後と知られたり。

(三)

初めは、

△白妙の優しき雪は肌をさく 幸い転じて仇となる 有
為転変の世の中に 小舟の中將春元は 從二位の官に任

ぜられ 飛ぶ鳥落す火の山の 榮華の夢もしばしにて

此処に起きたる騒動は 神の御告げの如くにて 時の帝

に引く弓の 味気なき世と変り行く

星野の太郎盛平が、春元君と玉姫との結婚について老臣の意見
を求めると、皆反対で、盛平の計らいで備前・備中兩國を支配す

る大將望山正司直行の独り娘花園の前を迎えることになり、盛平

がその使いに立つ。望山の家老羽柴右京之助が盛平と応対し、羽

柴は春元君の人柄・実力を知って心快く引受け、めでたく婚約と

なる。

絵の名人望山は、独り娘との別れを惜しみ、姫の絵姿を扇に写

し取る。

終りは、

△画像に名を得し望山が 其の年都へ御上洛 此処に

関白直直卿 今日火の山の中將の使者が来るかと待つ甲斐

も 噂を聞けば望山が 姫と婚姻致せし由知り

おのれ憎つき小舟の中將 此の恨みをば晴らさんと

手段を以て広直が 時の帝を取り入りて 無理が矢理で

も火の山を ひと合戦に及ばんと 思ひ立のさあ此れ

から どうでも火の山城内が さざめき渡ると云ふよう

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立

な 愉快は後と知られたり

(四)

その初めは、

△写し絵に 変り行く身は悲しけれ 流石名城火の山も

光元公は神去り給ひ 御台様にも過ぎさせ給ふ 不幸重

なる火の山も 中將公を始めとし 臣等一統集りて

仏事供養もねんごろに 孝道無類の春元は 味気なき日

を送らる

火の山城主光元もその北の方も歿し、孝道無類の春元は味気ない

日を送っている。 上洛した望山正司は、肌身離さず持ってい

た独り娘の絵の扇を関白邸に忘れてしまう。それが関白の手に入

り、望山は召されてその絵姿について問ひ質され、火の山に嫁し

た娘であると答える。 腹黒い関白は帝にざん言し、三条前中

納言が勅使となつて火の山に来、難題(芥子粒千石、あく繩千把、黒胡

麻千石)を持ちかけ、それができないならば花園の前を三十年間

宮中の勤めに出せとの命を伝える。 しかし、この難題も農民

たちの協力で整い、これを知つた勅使は逃げ帰つてしまう。

その終りは、

△第二の勅使火の山に 立つばかりでさあ此れから 如

何なる難題がかゝるか 漸く当年十七才の 信太の次

郎の光直が忠義のために身を捨て、 荒行致して神明の利

益を蒙り御勅使の 加藤の次郎忠澄と 対決致した其

の末は 首筋つか擱んで都へ登り 時の関白広直卿を
向ふに立て、光直が 命にかけて対決を
あま騒動は 公家と武士との意気地立て 矢弾やじまを飛ばし
しのぎを削る 騒動は後と知られたり▽

(五)

その初めは、
△松千代に 栄ゆる緑もいつか枯れ 堅かたき金城鉄壁も
時至らばその用を失ひ こゝに名城火の山も 滅亡の時
至りける こゝに中将春元公 臣等一統御前に集め
兩眼うるませ給ひ 春「やよ臣等の者承れ 林の中の高
い木は 風に枝をば折らるゝ習ひ 我れ火の山を領して
より 時の関白広直が仕業しわざにて 朝廷のねたみを蒙り
かく難題を受けるとは 如何なる過去の報のぞや 察し
てくれよ」とばかりにて 天魔鬼神も恐れざる 古今無
類の名將も 暫ししば落涙遊ばせば 臣等一統御道理と
貰もらひ涙に暮れにける▽
そこへ第二の勅使加藤の兵部忠澄が、「金の扇うぐいすに 雛ひな
を十二羽とまらせて 立たう立つまいの所 翼ひろを拵ひらげ
て法華経を 高音の声を帝が御所望 若し叶はずば
花園の前をば 御所の勤めに望まるゝ」と伝える。
「世にあるものならともかくも口づさみにもなきその扇」とあつ
て、盛平その他の忠臣たちが協議するが、困却してしまふ。
春元は、花園の前を自害させ、自らは大和へ上り弔い合戦をしよ

うと言う。そこへ十二勇士のなかの若年の信太の次郎光直がにじ
り出て三七日の御猶予を得て命に代えて差し出そうと言うので、
盛平が三七日の猶予を勅使に願ひ出る。

信太の次郎光直は、かねて信ずる四王司山の毘沙門天びしやに祈願しよ
うと、家に帰り決心を打明け、別れの盃さかづきを母と交わし、母とそ
の妻は自害して後顧の憂いを断ち、光直を励ます。

三七日折って満願の日になると、毘沙門天が現れて、求めの扇を
与える。光直は喜び勇んでそれを持ち帰る。盛平と光直がこれを
勅使に差し出すと、勅使は呆あき果あきれてしまふ。「やなに神秘には似た
れども 左様なものがあるべきぞ 虚言を作り此の方を
欺かんとは言語道断 某それがし実見致すべし」の言に、光直は怒

り、問答の末、勅使やその家臣をからめ取る。
その終りは、

△信太の次郎光直が 使となつて大和へ登り 時の関白
広直と 命まことを的の対決が そも合戦の本となる 小
舟の中将春元が 官軍相手に大合戦 聞くと云ふよな騒
動は 後の愉快と知られたり▽

(六)

信太の次郎は、からめ取つた勅使たちを春元の前に引き出し、「
諸士の方々合戦の 御用意あつて然るべし 拙者は此れ
より大和路へ 登城いたして関白広直と対決いたして……。」
と言う。

春元や御台様が、別れの盃を光直に賜わる。

関白は、第二の勅使が帰らないのはたゞごとでないと思つて、諸國の大名へ出兵を命ずる。

光直は、僅かな小勢を従えて関白の館へ行き、例の扇の献上方を願うが、関白は取り合わない。光直は、関白が御勅命と偽つたことを詰問し争ううちに、諸國の兵が押し寄せる。光直は縦横無尽に戦い、関白に怨みの一刀を報いようとする。そこへ、小舟の中將春元の軍が攻め上つて来る。

その終りは、

△中にも中將春元は　金切り割りの采配を　打ち振り打
振り威勢よく　都の軍勢一戦に　獻散らしくれんと勢凄
く　攻め登るのでさあ此れから　大和の國が一同に

煮えてかやるか砕けて飛ぶか
追々後と知られたり▽

続いて火の山落城は

(七)

血気にはやる春元は、味方の勇士を励まして斬りかゝる。春元は「信太の次郎を打取つた」の声を聞き、その日一日戦うが、勝負は決しない。三百州よりの大名の軍兵が続々と春元の軍に襲いかゝる。春元は「関白を討ち取れ」と叫びながら、関白の陣へ馬を躍らせ、大音声で、「やあやあ関白直眞卿　おのれの官位を望みに着て　人を人とも思はぬ振舞　從二位春元が天に代りて成敗致す　我が槍先を受けて見よ」と叫び、邪魔する敵を突き立て薙ぎ立て、関白が落馬したところをやつつける。春元は、その床几の上に錦の帛紗を見出し、手に取つて開くと

前田「火の山」合戦記（平曲の詞）ならびにその成立

それは例の金の扇である。「帝御受納垂れ給へ」と、それを空に投げると、不思議なことに後光を放つて清涼殿へ舞い下がつて落ちて行く（これから、清涼殿を扇殿と言うようになったと言ふ）。

春元は扇を献じ、本懐を遂げる。しかし、朝敵の汚名を受けた以上、一旦城に帰り討死しよう、兵を引いて帰り、本丸の大広間に火をかけ、春元・花園の前、勇士一同枕を並べて自害する。帝は、関白の悪意のために朝敵となつた春元を憐み給うたと言ふ。

その終りは、

△帝はかくと聞こし召し　「逆臣ならぬ春元を　関白直が悪意のため　朝敵と名を汚せしは　愍然の限りなり」と歴史の中に残されて　今の世までも金言に　残る火の山合戦の　履歷をこゝに巻き収め　語り伝えて目出度けれ▽

以上、全体は七つの部分と分れている。

(一)の彦山権現に祈つて一子を授かると言ふことは、安産祈願などと通ずるものであろう。また、一子が無いのは、光元と北の方が過去においてシナで罪業を重ねた結果であると言ふのも因果応報の思想であらうか。また、光元夫婦がシナから来たと言ふ発想も、この地域が地理的な関係から大陸からの帰化人もあつたろうと言ふ、民間信仰の現れかも知れない。

火の山の若君春元の数奇な出生を伏線とし、数奇な運命を辿った春元の末路を物語として、各部分をついに巧みにまとめあげている。いずれにしても、この連続物が一人の作者によって作られたものであるか、疑問である。

吉村藤舟氏によると、川尻本と言われるものでは前段および最後の脱落があったり、(一)のリウシヤ川(流舎川)がリウシヤナ川(流舎那川)となっていたり、また、部分によって、小舟弾正光元または小舟弾正光基、小舟中正春元または小舟中将春基、関白広直卿または関白広忠卿、玉姫または月姫、花園舞または花戸の舞、中帝三条先きの中納言または三条崎野中納言、加藤の兵部忠澄または加藤の兵部唯澄などと、人名が区々であったりすると言う。本稿引用の人名は、統一した。

これらの事から考えると、確立した台本があつてそれに基いて語られたものでなく、だれかが語つてそれを筆録したものであり、また各部分は必ずしも同一作者によって作られたものでないかも知れない。この(一)だけでもメロドラマをなしている。(二)は、階級制度の厳しかった時代の身分不相応な恋愛や政略結婚の話である。

(三)は、娘の結婚の不成立に伴う関白の意趣晴らしの話である。(四)は、関白が自分の意趣晴らしに帝にざん言して火の山に難題を吹っかけたが、農民や忠臣の忠誠によって難なく解決される話である。

(五)は、出来そうもない難題を吹っかけられた火の山の主君のために、忠臣が身を投げ出して関白の非を詰問する話である。(六)は帝の名を借る関白と火の山城主春元の戦闘の話である。(七)は、朝敵の汚名を着た春元が関白をやつつけて恨みを晴らし、火の山城に

帰り、城に火をかけて自決して滅ぶと言う戦争悲話である。

これらの各部分はそれぞれ興味を惹く物語で、各部分の最後の部分に、次の部分の展開を予測せしめる表現があり、続き物としての工夫が施されている。しかも、各部分とも口ずさむに都合のよい七五調である。そして、これらが平曲に合わせて物語られると、興味は深いであろう。

しかし、今このような伝説があまり伝えられていないようであるから、すべてがある時代のフィクションであろう。この火の山が交通上大陸に近く、しかも関門海峡の入口を抑え、要害の地であり、関門を守り烽火を上げる山ではなかつたかと思つと、人々はこの山の山容に接して一つのロマンを作り出さざるを得なかつたのではなからうか。そして、これが哀調を帯びた平曲の弾奏に合わせて語られる時、だれしも多大の感銘を受けたであろう。

その一部を紹介しよう。

(一)

千代の舞	八千代の剣末までも	武名を天下に轟かす
世は万代に治まりて	上は一天万乗の	しもべは下民に
至るまで	貴賤尊卑のわかちなく	日本六十余州
治まる御代の時こそは	頃しも人皇二十九代	欽明天皇
の御宇	太刀は鞆	槍はなげしと泰平の
りし騒動は	ここに中国	安芸周防長門の
固ある	前田火の山の御大将	小舟の弾正光元公とて
		三國警

ゆゝしき弓取りおはします さて儘ならぬ世の習ひ 君
 は名君その臣は 股肱と頼む一家老 世にも稀なる武勇
 の司 吉田影迎為氏は 弓の元祖と知られたり
 勝山弾正倉之助 文にたけたる者と知る 勝山城を固め
 たり 青山太郎義重は 太刀に麒麟と呼ばれたり
 内藤左内土佐の守 其の外臣等のめいめいは いずれも
 優り劣りなく 臣下に不足はなけれども 或る日大將光
 元公 北の方をば一問へ招き 言葉静かにのたまふは
 光「やよ北の方 今火の山は専らに 旭の昇る勢なるが
 此の一城も予が一代 跡を譲らん者無きは 笑止至極」
 と大將は 涙と共に御のうせ 只慎んで北の方 眉
 を潜めて細声も 北「君様の御意 わらはにとりても
 明け暮れ案じるは 一子の事 斯く堅固なる城中や
 股肱の臣も多けれど なにも一子が無かりせば 月に
 村雲花に風 満つればかくる月の影 股肱の臣もいつ
 しか交じ 君の御命望まんの、 今では無けれど後々
 事起こらんと 其れのみがどうやら 心に案じらる
 只何事も儘ならぬ 浮世の常の情無き わらはの胸を御
 推量 ありてたべよ」とばかりにて 目をしばたたき泣
 き沈む 弾正殿は声ありて 斯くなる上は人間の
 力に及ばず 神仏に祈誓をかけて 何卒一子を授けてと
 願うところは豊前の小倉 音に名代の彦山の 大権現に
 祈らんものと 議決致した事なれば 臣下に命じて御座

前田「火の山」合戦記（平曲の詞）ならびにその成立

舟の 用意にこそはかゝらるゝ 大願成就の吉日を
 たゞ楽しみおふた方 日柄を選び今こそと 光元公は
 甲冑の 三位の功を頭上に戴き 如何なる神にも仏
 にも 願ひ叶はぬ事なれば 再び此処には帰られじと
 お側近習を前後に従へ 泰然と立ち上がり 四方を見
 廻す有様は 天晴れ勇あるものゝふ 気高き風情物凄し
 北の方にもお位の こんだいそろうの官位を戴き 鳥帽
 子ひただけ花やかに 官女を召してしづしづと 揃ひの
 官女十余名 燃え立つばかりの緋の袴 いとちんゆう
 なる風情なり 皆も相方勢揃ひ 火の山城を後にし
 て 御座舟さして移らせ給ふ 供のめいめい其の場に待
 たせて 御夫婦共に彦山の 大権現に御社参りの
 七日の別火いつしか過ぎ 初めて神前に向はせ給ふ 精
 神凝らして御誓願 光「南無や当山にまします 彦山大
 権現よ 我こそは安芸周防 長門の三國を守る 火
 の山城に隠れなき 小舟の弾正光元なり 夫婦の中に子
 なきを憂へ 何卒 神力の徳により 男女を問はず一人
 を 授けてたべ」と一心に 願ひ入こそ殊勝なり
 光「北「偈も報恩謝徳には 今日より七日の断食を 仕ら
 ん」と御夫婦が 異口同音にのべ立てて 其の夜を始め
 精神凝らし 祈りの声は谷々や 峯も崩れんばかりなり
 偈も七日の満願 いや／＼今宵と切迫致す 御夫婦は差
 し向ひ 光「やよ北の方 今までさげぬ三位の頭

神と思へば敬ひをなし 此れ程頼む甲斐もなく 何の不

思議も現れず 凝らす誓願無益なこと 目にさへざらば

権現 只一討ちと柄袋 はずし給ふも道理なり

北の方は制し止め 北「こは我が君には御短慮と申すもの

凡人ならぬ神仏に 向ふ刃は何事ぞ」と 制する甲斐

も荒々しく 光「いやあごさかしや権現とやら 此の場

に正体現はせよ」と 満面に朱を注ぎ 身を震はせてい

たりける 恐る恐る北の方 北「こは何事と云葉を柔らげ

何卒明日の夜明けまで 静まり給へ我が君」と 諫むる

心誓ひの行 光元公其の夜は精神凝らしける 更けて

空の物凄く 木霊も眠る丑満の 時刻となれば御夫婦は

何とも知らずとるところと まどろみ給ふ折こそあれ あ

くら不思議や神力の 八十に余る老人 背に輝く光明は

あたりまばゆき其の有様 槍と剣を両手に持たせ 云葉

静かに御夫婦の 枕許にと現れたり 老「やゝ其れなる

夫婦 七日が間の大願も 夫婦の者の一心は 諸仏

諸天も納受ましまし どうか致して 一子を授けんと

思へど 夫婦の者 過去に作りし罪業の 男弾正光

元は 過去は天竺ヨウカイ山の 虎と生れし者なるが

無益の殺生数知れず なれど仏門一心に 帰依した故

に今生は 虎に等しき勇氣ある 天晴れ勇士と生るゝ

も 北の方とて其の如く 生れは天笠リユシヤ川

川下荒らす大蛇なり 或は雨を降らし 又は風を起こし

つゝ 数多の人を取り食らふ 罪は此の世で消え難く

過去の報るに比ぶれば 授くる一子更になし 如何に精

神凝らすと言へど 願ひは叶はぬ帰城に及べ たゞ今生

に忠を励み 孝に拔きんで 慈悲善根を専らに 仁

義五常を守りなば 未來往生疑ひなし ゆめゆめ疑ふ事

なけれ さらば」と云ふも霞がち 香の煙に異ならず

消えゆく跡に御夫婦は目を覚まし 互に顔を見合はせ

夢か現か幻の 蔭は仏か神の蔭 北の方は口を開き

北「我が君様もあの如く 神のお告げに相違なく 作り

し罪の報るにて 一子なければ詮方も 此の場は一旦御

帰城ありて 臣子の中より一子を設け 老後を頼まん我

が君様」と 涙にくれて北の方 曇る云葉に正体も

こぼす涙におし迫る 弾正公は事変り 一徹短慮の大将

なれば 怒りの顔あらはし 光「やよ北の方 虎と

大蛇の出合の夫婦 過去の報るの恐ろしさ とても一子

が無かりせば 生き永らへて末々に 頼り頼まん者も無

し 大権現も情ない ある子を授けて貰ふなら 願

ひも誓ひも頼みもいらぬ けんもほろろの神の告げ 斯

くなる上は北の方 そなたを此処で刺し殺し 余は此の

場にて割腹す 其の身の覚悟決心なれば 此処で一命落

した上で 夫婦は二世の縁なれば わきには行かぬ此の

山で そなたは昔の大蛇となりて 山を荒して給はれよ

余は昔の虎になり 荒さんもの」と覚悟の体 見るより

とどむる北の方 北「我が君様とした事が 余りと云へ

ば御短慮の 押して七日を籠つた上で 又の御告げを樂

しみに 押して願はん我が君と」と 道理の言葉に光元

公も 怒れる面を柔らげ給ひ 道理至極と其の夜を初め

再び精神凝らさるゝ 間もなく七日となりぬれば 今宵

がお告げと御夫婦は 今やおはすと待つ甲斐も 時刻た

がはず丑満と 移れば再び御夫婦が まどろみ給ふ折

柄に 以前の老翁現れて 言霊の御告げあり 老一

やあ光元天晴れなる心願にめで 天に一つの星である

其の星名つけて火星と云ふ 此れを汝等夫婦に授けん

なれど此の子が十七才の 弥生の春と聞きなば 時の

帝に弓を引き 刃を向ふ其の罪で 火の山滅亡の種と

なる 夢々疑ふ事勿れ さらば」と云ふもいつしかに

消え入るばかりと知られける 現の覚めたる御夫婦は

悦び勇むぞ限りなし 例へ火の山滅亡して 家名が絶

えようが汚りようが 帝に弓を引く者なれば 天晴れ勇

士ものゝふの 人は一代名は末代 其の名は末世に残さ

んと 押して七日は謝徳の籠り 三七日の御籠り済んで

御夫婦が下山なされた事なれば 守護の家来がそれぞれに

祝ひを祝す其の声は 天に轟くばかりなり 其れ御座舟

に移らせ給ひ 殿医はいと脈取りて それぞれ薬を調合

し 服用あるこそ道理なり 祝ひの者と諸共に 漕

ぎ出したる御座舟は 間もなく前田の浜辺の方へ 着か

せ給へば光元公 此れに移らせ帰城あり 臣下のめいめ

前田「火の山」合戦記（平曲の詞）ならびにその成立

い登城を許し 五層夜が其の間 さざめき渡る大広間

祝ひの声に咲く花は 十月十日の後を経て 神の授けと

知られける 安産ありし御公達 七日を過

玉に等しき御顔は 此の世の仏と見んばかり 座敷の上も御手車

ぎて御名前を 春若君と改めて 立てば歩めの御夫

乳母を選びて御預けの 這へば立て 只春若に余念なく

婦が 政治の事も打ち忘れ 送る年月いつしかも 夜を日についでの御

二葉に等し 文武の道に心を委ね 只も実直と思ひ詰め

修業は 臣たりともひんせさせず 只も実直と思ひ詰め

満十四才となりぬれば あくまで身の丈人に勝れ 云ふ

物腰のしとやかさ 臣下を愛する事子の如く 又臣下の

めいめいも 尊ぶ事神の如く いよ／＼本年十五才

元服遊ばし春若君 名をば小舟の中將春元公と改めて

元服祝ひに春元は 血氣の勇士十余名 前後左右に従は

せ 大和の皇居に参内の 結果が如何に相成るか

いよいよ前田の火の山が 上下活躍の大騒動は 追々後

と知られたり（未完）